

小学校体育授業におけるリズムと言葉を連動させた指導の効果

－「投動作」「打動作」に着目して－

山根茉愛瑠（愛媛大学）

1. 目的

令和4年度には、ソフトボール投げの記録は男女共に過去最低値を記録した。そこで、本研究では、「投動作」「打動作」についてリズムと言葉を連動させた指導を行い、①情意・知識・技能の視点から子どもの「投動作」「打動作」の習得に成果があるか、②授業実践前後の子どもの運動有能感の変容に成果があるかの2点を検証する。それを踏まえ、運動が苦手な児童にも分かりやすく楽しい授業を行うための指導のあり方について考察することを研究目的とした。

2. 研究方法

1) 授業実践

令和4年10月～11月の期間に、M市立N小学校の3年生(男子2名、女子3名、計5名)、4年生(男子7名、女子9名、計16名)のゲーム領域：ベースボール型ゲームを対象にした。授業は全8時間構成で、本研究者が授業を行った。

リズムと言葉を連動させた子どもにとって分かりやすい共通言語として、「合言葉」を用いた。投動作では、「取って、引いて、シュッ！」打動作では、「おへそ、引いて、シュッ！」とした。

2) 質問紙調査

「リズムと言葉を連動させた指導に対する児童の意識」「単元前後の情意の変化」「投動作・打動作についての知識の定着」「単元前後の運動有能感の変化」について調査した。

3) 動作分析

単元前後に児童の投動作・打動作を撮影し、それぞれ6項目を「3：大変満足できる」「2：概ね満足できる」「1：努力を要する」で評価した。

3. 結果と考察

1) 合言葉に対する児童の意識

合言葉の分かりやすさや学習効果を尋ねる5つの質問に対して、全ての項目で80%を超える児童が「そう思う」「ややそう思う」と回答していた。また、女子児童や野球未経験者の方が高い評価をしていた。

2) 単元前後の情意の変化

単元後に全ての項目で数値が向上していた。有意差があった項目について見ると、「投げる(打つ)が上手にできる」と感じている児童が増えたことや、「する」「見る」「支える」といった様々な視点でベースボール型ゲームを楽しむことができた児童が増加したことが分かった。

3) 単元前後の知識の変化

投動作・打動作のコツについて回答を求めたところ、記述内容の増加と具体化が見られた。

4) 単元前後の技能の変化

投動作・打動作ともに全ての項目で評価の平均値が向上していた。ボール投げの飛距離は、全体、野球未経験者、女子で有意な向上が見られたが、野球経験者では変化は見られなかった。

5) 単元前後の運動有能感の変化

単元前後で受容感、全体が有意に向上していたものの、大きな変化は見られなかった。経験別に比較すると、野球経験者のみ有意な向上が見られた。児童が自己の成長を実感できるような学習活動の選択が本研究の課題の一つだと考える。

4. 結論

リズムと言葉を連動させた指導は、情意・知識・技能の3点の変容から、子どもの「投動作」「打動作」の習得に成果があることが明らかとなった。特に、運動が苦手な児童ほど技能の上達が見られたり、学習内容の分かりやすさを感じていたりしたことから、運動が苦手な児童にとって分かりやすい指導法であることが示唆された。